

隊員活動から得たもの

村上 かおり

(15-1, エクアドル, 小学校教諭, 鳥取市立湖東中学校)

青年海外協力隊員として2年間活動することを、周囲が心配しつつも了承してくれたことは、とても幸せなことでした。しかし、活動を終えた今だからこそ、周囲もそして私自身も協力隊とは何かということを中心に理解はしていなかったのだと思うのです。「海外の貧しい人々のために、共に生活しながら援助するのだ。」ということは分かっていたのですが、隊員になるまではそれ以上を想像することはできませんでした…。



1 隊員活動について

私が活動したのは、南米エクアドル、アンデス山脈に囲まれた、標高 3000mにある小学校です。村人のほとんどは先住民（インディヘナ）で、山の斜面にとうもろこしやりんご、なしを作り、それを近くの町まで売りに行って生計をたてていました。5歳から12歳の小学校の子供たちは、紫外線のためにほほを赤黒くさせ、大きな目でいつも私を見つけると「セニョリータ！」と走ってきては抱きついて、ほほにキスをしてくれました。

私の活動要請は、“全校生徒を対象に音楽の授業を担当し、音楽の専門的な教育よりも、音楽の楽しさを生徒に伝える。また図工の授業も受け持つ。”ということで、教員不足の代替としての授業を担当することが求められていました。

子供たちに音楽や図工の授業を楽しんでもらえるように、そして子供たちの集中力を続けるように、様々な活動を取り入れて授業を行いました。私がキーボードを弾き始めると子供たちはそのリズムにあわせて行進したり、動物をまねて歩いたり。自由に場所をとって体の力をぬいて発声練習をして挨拶の歌を歌う。新しい曲を聴けば踊りだし、1ドルのリコーダーはおもいきり吹いてもなかなか音がでない。子供たちの描く絵には、子供たちの夢がたくさん出てくる。子供たちは見たことのない海や飛行機を描き、家族みんなで暮らせるお

城のような家を描いては夢を語る…。そんな子供たちの姿が私にいろいろなことを教えてくれました。そして楽器がなくても材料がなくても、そこにあるものを使って子供たちといっしょに授業をしていく楽しさを学びました。

ただ、活動をはじめてからずっと気になっていたことがありました。それは、自分が帰国したらだれがこの子達に音楽を教えるのか…ということ。凶工は、教育委員会から派遣されている先生が週3回通っていたので時間数は少なくとも継続されるだろうと思っていたのですが、問題は音楽の授業でした。私を含め、3名の協力隊員がこの学校には派遣されていませんでした。しかしいつまでも協力隊に頼っていただけとは限らず、なんらかの解決策を模索すべきではないのか…そう考えるようになりました。そこで学校長に提案して、担任の先生に音楽の授業方法を学んでもらうために、授業をTT（チーム・ティーチング）授業で行うようにしました。毎時間指導案と教材を担当の先生に渡して打ち合わせをします。何より、先生たち自身が音楽の授業を受けたことがありませんでしたので、とても不安がっていました。でも、私がピアノ伴奏をしているときにはタンバリンをたたいたり、新しい歌の歌詞を子供たちと音読したり、子供たちがリコーダーを吹くときは指一本でキーボードを弾いたりするなど、少しずつ授業へのかかわりの場は増えていきました。毎時間の授業案も少しずつ担任の先生に考えてもらうようになり、そんな担任の先生の姿を他の学校の先生たちに見てもらうことになりました。



エクアドルでは音楽の授業は専科の先生の仕事ですが、音楽教師の不足で音楽の授業が行われていないのが現状です。でも「楽器が弾けないから」「音楽は専科の教員の仕事だから」などといって何もしないより、音楽の授業の大切さを感じるのならば、エクアドルの先生たちにがんばってほしいと思いました。そのために私達隊員がその手助けをすることを伝えたくて、隊員仲間とともに、公開授業や講習会を開催しました。その公開授業で、楽器の弾けない担任の先生による授業を、私の学校の先生が行うことになったのです。音楽の授業は、音楽の知識や経験がなくても教えることはできる、音楽を教えようとする気持ちと他の教科を教えるのと同じ指導力や工夫をすれば可能であることを、他の学校の先生にも知ってほしいのですが、一番の成果は、何よりも私達自身が打ち合わせのためにそれぞれの校長や同僚と普段以上に会話をする機会を多くもつことができたことでした。交通費のことや日程のこと、現状報告の仕方、私は公開授業を行う担任の先生と指導方法や教材内容を相談する時間が自然と増えました。だからこそお互いに分かり合えるようになったと思います。そし

てこの公開授業をともに行った担任の先生は、他の学校の先生から「まるで音楽の先生かと思うような授業だった」と言ってもらい、それが大きな自信となり、私がいなくても音楽の授業を進めてくれるまでになりました。

私が活動を終えた今、担任の先生たちが20分でも10分でも子供たちと音楽を楽しんでいてくれることを願っています。

2 現職教員として

活動中、現職教員であることはあまり意識していませんでした。というよりも、それを忘れて新鮮な目でエクアドルの小学校で活動したいと思っていました。しかし教員としての経験があることがいろんな場で生かされたことも事実でした。

何よりも「授業する」ことには早く慣れたと思います。もちろんスペイン語の不安はありましたが、相手がエクアドルの子供たちであっても、授業の組み立方も発問の仕方も子供たちの反応をイメージして授業案をつくることも、日本で経験したいろいろなことが参考になりました。また、私が同じ教員であるからこそ、同僚の先生たちは私の提案に耳を傾け、技術を学ぼうという気持ちになってくれました。そして私自身も同じ担任を経験した一人として、担任の



先生たちの仕事の多さや担任としてのプライドを理解できました。初めのころ、音楽の時間になると担任の先生が教室から出て行ってしまったり自分の仕事をしたりして、全くフォローしてくれなかったことがありました。腹も立ちましたが、一人の教師として赴任していれば一人で授業するのは当然のことですし、「あなたのクラスの子供たちは行儀が悪い」といえば、たとえそれが事実でも担任としてはとても気分が悪いはずです。担任であったころを思い出したとき、担任にとっては授業数が増えるような私の提案を受け入れ、協力してくれている同僚に感謝の気持ちでいっぱいになりました。だから、「いつもあなたは私に協力してくれる」「あなたは子供への指示が上手だ」「あなたのクラスの子供たちはとてもリズム感がいい」などという声かけていると、同僚も「今日の指示はよかったですか」「私のクラスの子供たちはどうだろうか」などと尋ねてくれるようになったのです。

そんな中で強く現職教員であることを意識したことが二つありました。一つはよい意味でも悪い意味でも「先が見通せる」ということです。こんなことがありました…。小学校で音楽を教える新卒の隊員たちから『音楽指導書』を作成したいという話があがりました。日本で『指導書』がどういうものか、どう作成されているかを知っているからこそ、他の現職教員の隊員からは「無理だ。」「そんな甘いものではない。」と言われました。でも、「先が見通せる」からあきらめるより、エクアドルの小学校の音楽を変えるものとなる可能性があれば、失敗してもやってみてもいいのではないかと思ったのです。そうやって挑戦できるのが、協

力隊のよさなのではないでしょうか。「先が見通せる」ために、もしかしたら二の足をふんでいることがあるかもしれない...そう思いました。『音楽指導書』は付属のCDとともに約10ヶ月をかけて隊員仲間と作成しました。エクアドルの先生たちに役に立つのかどうかは分かりませんが、どんどん改良が加えられて、エクアドルの音楽教育の足がかりになってくれたらと思います。

そしてもう一つは、あたりまえのことですが、私達現職教員は同僚と同じ「教師である」ということです。つまり共通の専門をもっているのです。担任の先生と音楽の授業をしていく中で一番課題となったのは、担任の先生がもつ指導力の問題でした。音楽の授業をする上で最も大切なことは、音楽の知識があることや楽器が弾けることよりも、子供たちの興味関心を高める言葉がけがどれだけできるかとか、子供たちの技術や能力を高めるために同じ教材でどれだけ工夫ができるかという指導力なのです。私が毎時間用意する授業案をもとに担任の先生に授業をしてもらっても、それぞれの先生で異なりました。ある先生は子供たちの想像を膨らまして意欲を高め、先生自身のアイデアをどんどん私にも提示してくれました。一方ある先生との授業では、紙を配ってノートに張るように指示をするだけだったり、指示に時間を要し、その間に子供たちの集中力が切れてしまい、がまんしきれず私が指示をだしたりすることがありました。授業者の指導力で、同じ教材を扱っても子供たちの動きは全く変わってしまいます。常に指導力の向上に努めていかなければならないことは、日本であってもエクアドルであっても同じ教師として共通の課題ではないかと思うのです。そしてそれは、教科の独自性はあっても、算数や理科、音楽や体育など教科の枠を超えて、国境を越えてともに専門性で繋がっているということを強く感じました。だから、私は隊員として技術を伝える、と考えるより、同じ教師としてともに専門性を磨きあうものだと考えるようになりました。



3 協力隊員として

隊員として参加するまでは、「開発途上国の人々に何かしてあげたい」、そう考えていました。でも、助けられていたのは私自身でした。日本人のいない街で私が生活できたのは、私を家族のように心配してくれる同僚がいたからですし、街を歩けば声をかけてくれる人々がいました。悩んでいれば話を聞いてくれましたし、下手なスペイン語でも子供たちは一生懸命に聞いてくれました。だから私は「エクアドルのために隊員として生活する」のではなく「同じ職場の仲間として働き、一人の住人として街を歩く」ことにしました。「エクアドルのために何かしよう」そう考えていたから、欠点ばかりが気になって「時間にルーズだ」「アジア人を差別している」などと腹を立てていたのかもしれませんが。同僚と相談したり食事をしたりしていると、私がこの学校に来ることになったいきさつや教師間のグループの存在など

を知ることができました。子供たちと村を散策したり市場やお店の人と話したりすると、エクアドルの習慣や解決しにくい貧富の差が見えてきました。エクアドルの人々のそばにいようとすると、そのままのエクアドルが見えてきて、エクアドルを好きになっていました。だから、「何かしてあげたい」から「一緒に何かをしたい」と思うようになりました。

協力隊の活動は、「現地の人々とともに生活しながら援助すること」ですが、私はそのかわりだけしか理解していませんでした。しかし「現地の人々とともに生活しながら...」とは、その国を知ること、その国の人々を知ること、そしてその人々のそばにいること、それが何よりも大切であることを示していました。そして私はそれを経験する中で、その人々を好きになりました。ボランティアとは、その国を、その国の人々を好きになってはじめて、そこに何が 필요한のかが見えてくるものではないか、そう考えるようになったのです。現地の人々と同じところに住み、同じものを食べ、同じことを喜び、悲しめる...そして私達が好きになった人々のことを伝えられるのが、協力隊なのだ...そう、今私は強く確信しています。



青年海外協力隊に参加して ～ 隊員活動から得たもの～



平成15年度1次隊 エクアドル
村上かおり

発表内容

- 1 隊員活動の紹介
- 2 現職教員としてできること
- 3 隊員として得たもの
- 4 これからの協力隊へ

1 隊員活動

派遣国 エクアドル



住んでいた街 アンバト Ambato (標高2500m)

1 隊員活動 徒歩とバスで通勤



家から任地アンバテージョ村を見る

1 隊員活動

任地 アンバテージョ村 (標高3000m)



1 隊員活動

任地 アンバテージョ村



1 隊員活動 **ホセ・ホアキン・オルメド小学校**
Escuela José Joaquín Olmedo



1 隊員活動 **ホセ・ホアキン・オルメド小学校**

児童数 264人
(1年生～7年生)
教職員数 21人

校長室
普通教室
理科室
倉庫
調理小屋



1 隊員活動 **時間割**
El horario

1時間目	7:45	8:30
2時間目	8:30	9:15
3時間目	9:15	10:00
休憩	10:00	10:30
4時間目	10:30	11:15
5時間目	11:15	12:00
6時間目	12:00	12:45
下校		



1 隊員活動 **活動要請**

3代目の隊員として、小学校教諭として

- 授業を通して子供たちに音楽の楽しさを伝える。
- 図工専科と授業を分担する。



1 隊員活動 **図工授業**

あるものを使う



1 隊員活動 **図工授業** 子供たちの夢



1 隊員活動 図工授業
がんばりや独自性を褒める



1 隊員活動 音楽授業



音楽を楽しむ（歌、楽器づくり、リズムあそび、鑑賞 e t c）
 ペア・グループ活動 授業形態

1 隊員活動 音楽授業への提案

(1) 担任の先生に音楽授業を学んでもらう。
 (2) 隊員のいる他の学校の先生たちにも音楽授業の理解と協力を広げていく。



1 隊員活動 (1)担任の先生との授業




担任の先生に楽器をさわってもらおう

1 隊員活動 (1)担任の先生との授業



日本から届いた鍵盤ハーモニカの授業

1 隊員活動 (2)音楽授業への理解と協力 現地の先生との公開授業・講習会



1日目	午前	公開授業
	午後	講習会
2日目	午前	JICA主旨説明 隊員提案 質疑応答

2 現職教員として

- ・授業に早く慣れて、経験を生かせる。
- ・同僚の立場が理解しやすい。
- ・技術移転をするうえで同僚への説得力がある。



2 現職教員として

- ・先を見通せる。だから二の足をふむこともある。
- ・隊員としてより一教員として同僚とともに研修ができる。



3 協力隊員として

多くの人との関わりの中でその国を好きになる



3 協力隊員として

「してあげる」から「一緒にしよう」へ



4 これからの協力隊へ

JICA や事務所、仲間とともにビジョンを語り合う。

自由な発想でいろんなやり方を試していこうとする。

